

# 19世紀中後期のイギリスの労働者たち—雇用と不況の狭間で

People in the economic depression in the mid and late 19th-century Britain

亀塚 智章  
Chisho Kamezuka

〈目次〉

- 1 はじめに
- 2 雇用と不況の狭間で
- 3 おわりに

## 1 はじめに

1850年以降、熟練労働者を中心とした産業は、都市部に流入する不熟練労働者の増大や周期的不況に見舞われ衰退しつつあった。低賃金による雇用、女子、子供労働者の拡大などで、多くの労働者たちは厳しい環境にさらされた。地域によって労働者たちの生活環境や労働環境も異なるが、多くの労働者階級家庭は、急速に変化する経済社会に大きく左右された。中期イギリス社会の経済的発展の恩恵が、稼ぎ頭の労働と賃金に依存していた彼らの生活に浸透し始めるにかなりの時間を要したからである。物価高と賃金悪化、それに輸入品や安売りとの競争など、生活環境や労働環境はより厳しくなっていた。そうした情勢の中で、彼らはどう生きぬいたのか。この小論では中期を中心に、その流れの中で彼らの生活模様を職場環境、地域社会、家庭などを通して取り上げる。不況がもたらすさまざまな問題に葛藤する人々の姿を通して、19世紀中後期という時代や社会が抱えていた問題を考えてみたい（本論で用いるいくつかの用語やその概念を、ある程度明記する必要があると思う。常用雇用労働者—1年を通じて定期的に労働し、毎週何か仕事をしている人々。パート労働者—熟練労働における不完全就業者、あるいは過剰労働人口のため、不定期雇用に戻ったりしている人々。失業者—仕事のできる年齢になり仕事を望み探しているがみつからない。解雇されたり、好む、好まざる労働移動によって数週間、数ヶ月間あるいは長期仕事を失う熟練、不熟練の人々。非雇用労働者—まったく雇用されていない不熟練労働者を中心とした人々。ある意味で仕事を長期失った熟練労働者も含まれる。不完全就業者—ほとんど毎週フルに仕事をしていない人々で、一般労働、湾岸労働、道路工事、洗濯奉仕、家内小売業などを中心とした労働者を指す）。

## 2 雇用と不況の狭間で

H. Mayhew は1850年ごろのロンドンの小売産業の労働者形態を、常用雇用労働者3分の1、パート雇用労働者3分の1、日雇いなどを含めた季節労働者3分の1<sup>(1)</sup>とみている。ただ産業分野に流動的な状況があること、また都市部に集中する労働人口の影響で、労働市場の雇用形態がどのような形で推移していくのか定かではない。小売産業はすでに強力な組合組織を築いているが、都市でも地方とロンドンやその周辺都市では、その雇用状況も異なっていただろう。しかし不況のような厳しい労働環境にさらされると、労働者たちの生活環境は多くの点

で共有する特徴を持っている。1842年のリヴァプール製造業地域 Vauxhall 区の4,814世帯の雇用調査を例に、労働者たちのおかれた状況を取り上げてみる。不況にさらされる一地方都市の雇用状況は、当時の労働者の生活がどのようなものであったか、ある程度示唆してくれる。同時に、その後のイギリス産業社会の不況時に直面した労働者、特に下層労働者にみる生活パターンを想像させる特徴も暗示すると思われる。この雇用状況は、Mayhew が指摘した労働者形態がすでに始まっていたことを裏付けている。

Extent of employment in Vauxhall Ward, Liverpool 1842

	Not employed	Fully employed	Employed five days per week	Employed four days per week	Employed three days per week	Employed two days per week	Employed one day per week	Not ascertained	Total
Labourers	855	807	17	206	344	271	113	15	2628
Widows, and other females	459	91	2	8	63	56	3	101	783
Coopers and brushmakers	11	31	1	7	9	6	4	-	69
Smiths and engineers	35	89	1	8	14	2	3	5	157
Slaters and plasterers	20	2	1	5	3	5	3	1	40
Painters, plumbers and glaziers	28	12	-	6	7	5	6	-	64
Joiners and cabinet-makers	54	48	-	9	5	10	2	26	154
Shoe and bootmakers	50	49	1	23	56	44	18	8	249
Tailors	40	24	-	8	30	26	6	4	138
Bakers and millers	10	22	1	-	1	1	-	2	37
Bricklayers and stonemasons	35	11	1	7	9	5	6	1	75
Sailors, fishermen and pilots	28	120	-	5	7	3	-	31	194
Millwrights and wheelwrights	5	19	-	2	1	1	1	3	32
Engravers and watchmakers	7	5	-	2	2	4	2	-	22
Sawyers	7	8	-	4	6	3	3	6	37
Sailmakers, riggers, and block-makers	13	12	-	5	10	5	2	-	47
Shipwrights and ropers	16	11	1	10	15	5	2	1	61
Printers and bookbinders	2	8	-	-	1	1	1	11	24
Timmen and braziers	9	22	-	-	3	1	-	1	36
Iron boiler-makers	6	27	-	3	-	-	-	1	37
Iron moulders	8	12	-	2	-	-	-	-	22
Nail-makers	10	16	1	3	2	4	-	-	36
Sundry other trades	29	44	-	1	7	7	1	1	90
	1737	1490	27	324	595	465	176	218	5032
Not employed									1737
Fully employed									1490
Employed five days per week									27
Employed four days per week									324
Employed three days per week									595
Employed two days per week									465
Employed one day per week									176
									1587
Not ascertained									4814
Not described									60
Total									5092

出典：J. Burnett, *Idle Hands*, p.94.

組合組織が強固といえない地方都市では、特に経済の動向に雇用状況が反映されやすい。リヴァプールはアイルランドからの大量移入で、移民が1842年総人口の22%<sup>(2)</sup>をすでに占めていた。Mersey 河岸沿いには大小約26の埠頭が横一列に並び立

ち、Tithe Barn Street, Chapel Street を抜けわずか800メートル市内に入れば、製造業の中心地 Vauxhall へ行くことができる。好況時熟練工たちは、それなりに安定した生活を送っていただろうし、貧困ながらも、まずまずの生計を立てていた下層労働者たちも多くいただろう。出入りする多くの労働者たちで港町は活気づいていたに違いない。しかし不況時はそういかない。多くの労働者たちが生活にあえいでいた。その大半は不熟練か一般労働者であった。土木建設中心の肉体労働者や港湾労働者たちである。不況時では、失業率の高い一般労働に食い込むことすら容易でなかった。ここで雇用対象者となっているのは、地元、田舎からの移入労働者、農業労働者であろう。一般労働者に続くのが寡婦、女子労働者。後述するように、1850年以後急速に増大し始めた家事奉仕業や、従来からの洗濯、クリーニング、下請け家内小売に携わる女たちが大半と考えられる。1840年代、労働者階級で女子に開かれた職業がほとんどなかったからである。

この表では、一般労働者2,613世帯（不詳を除く）中、失業855世帯（約32.7%）、パート労働951世帯（36.4%）、常用雇用807世帯（30.9%）。また女子労働者682世帯（不詳除く）中、失業459世帯（67.3%）、パート労働129世帯（18.9%）、常用雇用91世帯（13.3%）で女子労働者世帯の86%以上が貧困状態。また熟練工1,531世帯（不詳除く）中、失業423世帯（27.6%）、パート労働516世帯（33.7%）、常用雇用592世帯（38.7%）で、熟練労働者世帯では稼ぎ頭の4人に1人以上が失業し、雇用された3人に1人はパート労働に従事していたことになる。つまり調査対象世帯の69.2%が不安定な生活、または貧困状態におかれていたことを示している。

次に業種別による雇用状況をみてみよう。

都市部層で最大の手職人といえば靴、ブーツ製造業に関わる熟練労働者たち。1848年ごろ主要都市全体で2万8,570人いた<sup>(3)</sup>といわれ、家事奉仕、一般労働者に次いで第3位の業種。Vauxhallでも一般労働者、女子労働者に次いで第3位の労働者数になっている。都市では強い組合組織をバックに職人地位を築き、短い繁期（4月～7月）にかかわらず、安定した賃金体系を維持してきた伝統的な労働貴族である。1847年1日10時間労働法が制定されたが、不況時は1日13、4時間に増加。Mayhewによると<sup>(4)</sup>、1847、48年の不況時のロンドンでは労働時間の増加だけでなく、賃金も減少している。週27シリング、1年の平均週賃金は15シリングだという。1867年のD. Baxterの賃金資料<sup>(5)</sup>では当時の靴、ブーツ製造工の賃金は平均週21～25シリング（組合員の正規被雇用者の基本給は週28～35シリング（本論p.6参照）とみなされていたが）であり、約20年間賃金にほとんど変化がない。むしろ減少気味で雇用環境の悪化を示した一例だろう。Vauxhallでは、241人（不詳を除く）中、非雇用50人（約20.7%）、常用雇用49人（約20.3%）、パート雇用（4日～1日）141人（約58.5%）。約5人に1人が常用雇用に過ぎない。

仕立業もロンドンでは靴、ブーツ製造業に次ぐ強い組合組織を持つ業種だが、Vauxhallでは第5位の労働者数。134人（不詳を除く）中、非雇用は40人（約29.9%）、常用雇用24人（17.9%）、パート雇用計70人（52.2%）。約5、6人に1人が常用雇用。

第4位の熟練労働者数を占めるのが建具、家具製造業。熟練の中でも社会的地位が靴、ブーツ製造や仕立屋より上位とされる業種である。128人（不詳者除く）中、非雇用54人（42.2%）、常用雇用48人（37.5%）、パート雇用計26人（20.3%）。約3人

に1人が常用雇用。

他方第3位の熟練労働者数を占める鍛冶屋、エンジニアは常用雇用が152人中89人（58.6%）を占め、非雇用は35人（23%）。第2位の船員、漁師、水先案内人の場合、163人中、常用雇用120人（73.6%）、非雇用28人（17.2%）。パートを含めた雇用率は82.8%になる。また安定雇用の高い職種は樽製造、ブラシ、刷毛製造業で、パートを含めた雇用率は84.1%となっている。雇用数が少ないが雇用率の高い業種として、スズ細工職人、真鍮細工職人74.3%、ボイラー製造83.3%、くぎ製造72.2%などがみられる。

このことから、次のように整理できる。

#### 雇用全般

- ①一般労働者（不詳を除く）の雇用率は約68%。うちパート雇用は36%を占め、労働従事者の約2人に1人以上がより不安定なパート雇用状態にいる。
- ②寡婦、女子労働者（不詳を除く）の雇用率は約33%。うちパート雇用は約41%を占め、約1.5人に1人が男子以上に不安定なパート雇用におかれている。
- ③熟練労働者（不詳を除く）は常用雇用592人、パート雇用523人で、雇用率は約67%。うちパート雇用は約47%を占め、熟練の約2人に1人がパート雇用でしのいでいる。

#### 非雇用全般

- ①一般労働者は約33%が非雇用。寡婦、女子労働者は約67%が非雇用。
- ②熟練労働者は約25%が非雇用。

#### 熟練職種

- ①靴、ブーツ製造／雇用率78.3%。うちパート雇用52.2%（約3人中2人が不安定雇用）。
- ②仕立業／雇用率70.1%。うちパート雇用52.2%（約4人中3人が不安定雇用）。
- ③家具、家具製造業／雇用率57.8%。うちパート雇用20.3%（約3人中1人が不安定雇用）。
- ④鍛冶屋、エンジニア／雇用率77%。うちパート雇用24%（約3人中1人が不安定雇用）。
- ⑤船員、漁師、船乗りパイロット／雇用率82.8%。うちパート雇用32%（約3人中1人が不安定雇用）。
- ⑥樽製造、ブラシ、刷毛製造業／雇用率84.1%。うちパート雇用46.6%（約2人中1人が不安定雇用）。

熟練産業においては、ゆっくり衰退していく業種とこれから成長期待の高い業種間でも、不況時では、常用雇用とされた熟練の約2、3人に1人が、景気の動向によってパートや失業の可能性を示唆している。特に組合員といえども雇主との力関係は不況に影響されたし、よりよい条件を求めた労働移動や、病気怪我を理由に解雇が一般的に行われていた背景がある。雇主と労働者の間では、一部の熟練を除き単年度契約がありふれていた。そのため景気の上下にかかわらず、大半の業種では繁期、閑期の中で雇用調整が行われていた。不況時に出入りの激しいパート雇用労働の比率が高いのは、このような背景がある。こうした職場環境の中で多くの労働者たちは、不安定な生活基盤を組合組織で支えることになる。

1841～2年不況にさらされたVauxhall区では、4,814世帯中1,737世帯の稼ぎ頭（女子労働者の場合定かでない）が失業し、1,587世帯の稼ぎ頭はパート雇用という現状を抱えている。そして残り2,126世帯が誰かに支援を要し、うち1,052世帯が質屋、慈善、犯罪などに依存した生計を、1,017家族が儉約、信用借り、親戚からの借金または一時雇用に依存し、57家族が

教区の救済に頼り、2,126家族のうち1,236家族は借間住まいで、家具類は持っていなかった<sup>(6)</sup>という。親戚、知人からの借金、質屋を利用する、食料を中心に支出を抑える、こうしたことは熟練家庭でも一時しのぎに過ぎない。家族の扶養を夫に依存する当時の一般的家庭の様子は、次のように紹介されている。

「…食べ物もなく、まじめで酒も飲まない夫たちは、朝から晩まで仕事探しに奔走する。隣人が彼らに付き添っていろんなところを訪れ、仕事探しに協力してくれた。地域の家族的な接触を通じて、元の同僚や、親戚、元の雇主にまずあたってみる。このつながりから、友人宛へ希望する雇主からの紹介状や推薦状をもらう<sup>(7)</sup>。」

しかし不況時では、地域でことはなかなかうまくはかどらない。そこで選択肢は限られてくる。多くの失業者が遠方に職探しに出かける旅回り制度は、熟練労働者人口の移動によって失業緩和策を取る。これは熟練工組合の救済手段として知られている。この出稼ぎに似た旅回りは、1860年代までは失業者対策の大きな柱でもあった。組合運営の安い宿泊施設を国内に配置し、地元優先で日雇いや一時雇用の斡旋によって、労働過剰の調整配分を行う。労働過剰や過当競争といった常用雇用への弊害を減らして賃金の安定を計り、地方の失業者が優先された。そのため組合組織の強い業種ほど、失業に対する保護制度に恩恵を被るものも多い。旅回りは幅広い業種で行われており、いくつかの業種は合併し組合員の増大組織の強化を図ったが、不況時は路上放浪の組合員が多く組合基金の弱体化<sup>(8)</sup>につながっている。

1840年代後半の不況時、リーディングではすべての鉄鋳造工4,000人が旅回りになり、うち1,200人が路頭にさまよったケースでは、失業手当として鉄鋳造工組合は1人あたり13週間分週8シリングを、次の13週分週4シリングを支給<sup>(9)</sup>。またボイラー製造者も自宅払いで20年間の組合員実績の場合、1日1シリング6ペンスを受け取っている<sup>(10)</sup>。1851年自宅待機救済制度を鉄鋳造工、エンジニアなどの合同組織団体が導入。失業に対し14週間分週10シリング、次の30週を週7シリング、それ以後週6シリングを支給する強力な組織運営を実施<sup>(11)</sup>。しかし不況期間によって会費アップも避けられなかった。

熟練労働者は、生活の安定と保障を仕事の中に求めていた。5～7年の見習いや徒弟制度は、1850年代崩壊しつつあった。徒弟、見習いは週1～2シリングの基準賃金でスタート。修業終了時(18～21歳)になると、資格を持った大人の賃金の約半分を得る。小さな店では3～4人または日雇職人が雇用された。しかし見習いの場合大人の賃金で働ける場所がなかった。熟練は組合の確立した賃金体系を維持する一方、未熟練、見習いの賃金を抑えることで経済的安定を図ろうとする<sup>(12)</sup>。そのため見習い、徒弟はその町では勤め口がなく、旅回りなどで探さざるを得ない。小売不況とともに徒弟制度が衰退していく背景もここにある。不況時、彼らがさらに厳しい状況にさらされることはいうまでもない。

1840年代 Thomas Wood のケース<sup>(13)</sup>。両親は貧しい手織工。彼は10人兄弟の年長であった。彼は父と同じく織工カウールのすき工を目指していた。Bingleyでは当時、人口の9割がこの仕事で雇用されていた。しかし父は彼に機械工になる道を与える。後年 Thomas は手織工が衰退していくことに気付く。息子の徒弟修業のため両親はその支度金に苦勞。Thomas は自動織機の機械工に。約2ヵ月後主人(雇主)と一緒に地元を出たが、小売業は極端に悪化していた。彼はすぐ首になる。路上では乞食が多かった。6～8家族が路上でうろついていたのを彼

はみている。それでも家の外側や隠れ場所、干し草のあるところをみつければまだ幸せだった、と Thomas。彼はランカシャーから1ヶ月間放浪の後、Platts Brothers (Oldham) でまずまずの賃金で雇用される。しかし1846年他の50人とともに仕事を停止、数週間後に来るよういわれ何が起きたのか知った、という。

J.H. Powell<sup>(14)</sup>も1853年エンジニアとしての徒弟修業を終え、その後ミドルセックス、ランカシャー、ヨークシャーなどの主要都市を転々と放浪。16ヶ月間中仕事があったのは4ヶ月。12軒それぞれ違った業種の店で短期間働いている。

1850年代のロンドン。大工組合は当時の安売り組織に対し1日5シリングを死守。が、過剰労働者として田舎出身の徒弟見習いが安売り組織に低賃金で吸収されていく。その結果、組合員の3分の2が定期的な仕事に就けない時期もあった<sup>(15)</sup>。春と夏が繁期である大工の1850年代主要都市での失業率は7.5%<sup>(16)</sup>。安売り組織で雇用された徒弟見習いは週1ポンドで劣った仕事をこなしたが、病気、怪我などへの保障や支援はない。家具製造は8,580人の組合員を擁し、雇主の許可の下で働いた。週60時間、最低賃金週32シリング。しかし週6ペンスを自分たちの組合に納め、失業期間中(期限が決められている)週10シリングを組合が支給する制度を採用<sup>(17)</sup>している。この他に零細安売り組織があり、彼らの賃金は常に雇主に依存。雇主は屋根裏部屋主人といわれる新規参入者たちで、独立して1、2名の苦汗労働者を雇い家族と一緒に家で働く人々である。多くが失業を避けるためにする仕事で、自分たちの製品を仲買人に売る。家族全体で働いても週2シリング<sup>(18)</sup>という。

機械化のあおりで失業者を生む地域もある。40年代ヨークシャーやリーズでは、自動精紡機の導入で賃金カットや失業に追い込まれる手織工も多くいる。William Dodd が街路でみる失業者の姿<sup>(19)</sup>は、大人の織工にとって代わる低賃金の子供労働者の増大を示している。ヨークシャーの手織毛織工は見習い研修後週36～40シリング稼いでいた。自動精紡機導入後、汚い服を着た子供たちが代わりに週5～8シリングで雇用された。リーズでは、何人かの大人たちは週10～14シリングで働くことを強いられている<sup>(20)</sup>。

多くの工業都市では、産業が低賃金の労働供給源として女子や子供たちをフルに利用し、下層労働者も生計のため、家族全員が地域の産業に依存する構図がある。そのため、ささやかな賃金を求める工場労働者として、若い母親が働く光景はよくみられる。多くの北部都市の綿工場では5人に1人が、レスターでは、綿、メリアス製造(靴下)業では2～3人に1人が賃金労働をこなしていたともいわれている。夫が失業していても労働する妻は、家族の地域信用と地域共生を最大限に生かしている。これは、下層労働者階級社会で家庭運営を任される彼女たちの備えた能力でもある。夫の安い稼ぎで家庭を守る女たちの、地域の人的ネットワークの利用、衣類食料の貸し借り、夫が失業すればなおさらあらゆる手段で苦境を乗り切る強さが、その辛抱強い生活観に反映されている。地縁や親戚、同僚たちとの強い土着的結束、こうしたものは R. Hoggart の描く1950年代の地方労働者階級社会の原風景的な生活形態でも示唆されている<sup>(21)</sup>。この生活風景と生活観は長い時代を経ても大きく変化していない、という Hoggart の見解は、19世紀中期の下層労働者たちの基本的な生活観や生活形態を具体的に学ぶ上で、1つの手がかりを与えてくれる。少し立ち寄りてみよう。

「やつら」と「俺たち」は、成金、成り上がり連中に対する線引きであり、仲間意識からくる不快感や反発を表すものだ (p.64)。

彼らの衣類はつぎはぎが当たり前、靴は値段が高いため1足で何年ももたす。子供たちは裸足のままといいのはありふれていた。しかし悲しいとか惨めなという表現は当たらない。湿っぽい、ゴキブリだらけのちっぽけな家。地面に掘った便所から悪臭が漂う。いつも同じものを食べていたが、栄養はまずまずだ (Hoggart 自身の回想, p.45)。

労働者階級の夫たちは体つきから区別できる。小さく色黒で、30歳過ぎから顔にシワが目立つ。首筋からの骨組みがはっきり浮き出る。ドッグレースに出る犬のような顔つきで一生涯残る特徴だ。父親は自分の家ではボス。亭主、女房も認める伝統。いい亭主は家族を貧乏のどん底に落とさず、不景気でも解雇されず、定期的にきちんと家に金を入れるいい労働者を意味した (p.53)。

夫が粗暴な態度を示すことはどこでもありふれていた。夫が最初から家のことを手伝うものとは思われていない。家事を手伝うと女房は喜ぶが、手伝いをしなくてもうらまれることはない。家事をやると女のようだとみなされ、格好が悪い。家庭の維持、調和は共同の責任ではない。金曜日の夜給料袋を渡し、女房に任せる家。家庭の金の問題は共同の責任と考える亭主も多い。妻に毎週決まった額を渡す家。賃金の配分権が夫にあるという考え。女房がもらった賃金で家庭のすべてのやりくりをするというのが、一般労働者、伝統的な下層労働者階級のありふれた家庭生活だ。彼らにはネットワークとしての親戚、友人、隣人の相互支援がある。地域社会の相互依存、助け合いが仲間としての生きていくための知恵であることを肌で感じ取っている。哀れみや寛大さから人助けするのでなく、単純に人助けがいざというとき自分に必ず回ってくるといった、ギブアンドテイクの地域社会が中心的支えであった。大都市では貧乏人は移動できなかつた。ローカルな暮らしは、みんなが知っている俺たちの社会なのだ (p.55)。

イギリスの都市部人口は、1801年から50年にかけて900万から1800万へと倍増。ロンドンでは、1851年から10年間で1.5倍の300万へと大きく膨張する。ロンドン移入者の大半が、田舎や農業地域からの貧困家庭層から成る不熟練や一般労働者、それに徒弟関係の若者、女子、子供、外国人労働者たちである。こうした人々の多くがやがて近郊の工業都市労働者として50年代後半吸収されていくが、ロンドンではこうした貧困層を低賃金の使い捨て労働者として大量に雇用、その労働力をバックに安売り店として急速に力をつけてきた別の小売グループが、熟練小売に大きな影響を与える。熟練小売は輸入製品との競争にも直面していた。加えて余剰人員、大量の在庫という問題も抱えていた。当時のロンドン市場は、絶え間のない人口流入と工業化の未成熟、労働力の需給関係の複雑さに加えて、組合組織による賃金の安定化、労働者自身の生活防衛も必然課題であった。熟練小売業では、パート雇用、特に繁期の安い労働力が追いつけを掛け、特定業種以外は熟練間でもその労働環境の変化に即座に対応できなかった。いわば在庫と賃金悪化に苦しんでいる状況がほとんどの業種でみられる、という事実である。19世紀中期、中流階級では失業を無能の結果、自助努力の欠如という風潮が強くなり、そうした偏見は通常低階層に向けられている。しかし敬われる、清楚、自助努力をモットーにした熟練労働者たちも周期的不況により仕事を失ったし、相互救済、組合支援で改善された事実もあったが、現実的にはその環境が計り知れないほどに厳しかったといえる。Vauxhallで熟練の平均約4分の1が失業状態におかれていたことを考えれば、1850年代ロンドンでは表向きの景気にかかわらず、失業が熟練労働者間でもさらに広がりつつあったことになる。

事例を取り上げてみよう<sup>(22)</sup>。靴、ブーツ製造業ではフランスからの輸入品との競争、またノーザンプトンの工場から低価格の靴が大量に入ってくるため、West End靴職人の間で激しい競争がある。他方East Endの廉価小売との競争にも巻き込まれた。East Endでは少年や見習い労働力の増大という背景がある。こうした労働力の供給源となった家族は、家族全体が1日15時間労働で貧困に追われた人々で周囲にあふれていた。West Endの組合に所属する熟練でも1年で5ヶ月のみの雇用、ほとんどが借家住宅で家賃も高かった。常用雇用労働者でも、1年間の平均週賃金が15シリング(本論 p.2 参照)に過ぎない。

仕立業は安定した賃金と強力な組合組織をバックにしてきたが、1820年代までにFlintsとDungs(安い既製服販売)組織に分かれた<sup>(23)</sup>。Dungsがすでに全仕立業労働者の3分の1を占めていた。家族全体が長時間労働で稼ぎ頭を支える、といった小さな内輪所帯から成り立つDungsの数は、1826年の不況後急増する。仕立業は5~7月が繁期、8~10月が閑期。1850年代すでにさびれた業種ともいわれ、多くの仕事が家内労働に委託され女や子供が雇用される。繁期を除き熟練労働者でも、この下請け労働週4~6シリングにまわっている。

ミシンなどの導入、見習い、女子、子供たちの低賃金雇用人口の増加は、低賃金の一般成人男子にとって代わり、熟練の雇用機会を減少させていくことはいうまでもない。加えて低賃金の下請けや営業は、季節や流行、経済の動向に大きく依存する。またロンドンの仕立小売業は、1860年ごろまでに多くのユダヤ人労働者で占められており、熟練労働者の賃金低下と安売り、失業に拍車をかける背景となっている。そのため、仕立熟練小売組合員の20~25%が1年のうちわずか2ヶ月間しか仕事がないという例<sup>(24)</sup>もある。こうした移民労働者の多くは大量販売のEast Endに集中し、仕立業、靴製造業、家財製造業小売にさらなる影響力を発揮するようになる。コート、ベスト、ズボン製造はユダヤ人業者や低賃金労働者に委ねられるほどの勢いで、19世紀末には当時のロンドンの仕立屋の労働力の3割強を占めるに至っている。

1860年代、革半ズボン製造の職人Francis Placeは次のように回顧する。

「…主流だった革製の服やビロード服が綿製になり、労働者たちが着用し始めた。そのため革加工職人の常用雇用はほとんどなくなっている<sup>(25)</sup>。」

女性労働者はどうだったのか。女性労働者も同じく女性同士で、競争と生産効率化による失業問題を抱えていた。小売業では特に仕立屋、靴製造の分野で男子に代わる傾向が業種によって表面化する一方で、手織を中心とした小売製造が工場生産へと移行、安い既製品市場に向けられていく。またミシンが低賃金雇用の仕立業を、衣服製造のロンドンの安売り小売業を増大させた。同じころリーズや北部の町では工場生産が増加。19世紀末までに革製品加工にミシンが採用される。ロンドンではミシンが低賃金の外注仕立屋、衣服製造業をさらに増大。仕立業はもともと男たちの独占業種だが、冬場の需要期を除けばシーズン不況に苦しんだ。また夏の閑期では安売り、低賃金の既製品によって需要をさらに減らした。仕立小売組合では、3分の1の熟練工がこうした機械化と安売り攻勢で職を奪われていく。ロンドンの靴製造小売でも、男子労働者は1861年33,435人いたが1901年には24,000人に減少<sup>(26)</sup>している。繊維工場労働者の最善策は、失業より時短労働を選択することであった。後にミシンによる革製品加工工場も、ノーザンプトン周辺に集約されていく。そして緻密な手作業を要求する靴、ブーツ製造

では、閑期でも低賃金の粗雑で安価製品が大量に出回り、熟練製品需要を圧迫<sup>(27)</sup>していく。

組合以外の零細安売り組織では、労働者の賃金は常に競争にさらされ雇主に依存した。この労働環境におかれた貧しい女、子供労働者は苦汗労働者といわれ、仕立屋、靴製造業労働者に当てはめられる言葉でもある。失業で一番苦しむのが苦汗労働者や非組合員であり、小売業の組合員と非組合員の格差は歴然としていた。また非組合員たちは救貧法以外、公の救済はなかったのである。苦汗労働者たちは自宅や小さな作業場、その屋根裏で極端に低い賃金で、単純な作業に従事した。製造業者から仲買人へ。仲買人は末端生産人をわずかな賃金で雇用し、不定期雇用で収益を最大限吸収したのである。

1880年女子在宅労働者の平均賃金は週8～9シリング平均<sup>(28)</sup>といわれるが、これは正規の仕事に就いているもので、失業時や繁期のパート賃金や苦汗労働賃金と比較できない。衣服業で働く女子労働者は家事奉仕業に次いで多く、East Endの安売り仕立小売業（この時期召使用のプリント服地製造が主流）では、1年を通じて週2.5日労働であった。またミシン加工による生産のスピードアップは、衣服、婦人帽子製造の季節労働期間を短くした。彼女たちは暇な季節は路上に出され、次の繁期は無賃金で待つことになる。

コート製造業では、下請け店は1年のうち約6ヵ月が閑期となる。靴、ブーツ製造では繁期は数週間に過ぎない。この業種では外で働く労働者は常用雇用の労働者だけで、注文に応じて製造する工場の女子労働者は、1年を通じてイングランド東部では週3シリング平均ともいわれ、需要が不規則で雇用が不安定であった。

靴、ブーツ小売業、仕立業に次いで第3位の衣服と婦人帽子製造業の場合。この業種にも、信用と上品さを売る小売店グループと安売り小売店グループが存在する。Milliners 商会は新興中流階級雇用の雇用代理店<sup>(29)</sup>で、2～7月の流行シーズン中多くのパート労働者を雇用しているが、1人週1シリング6ペンスという低賃金になっている。

雇主は季節の需要状況を読み、質の高い労働者を中心に経営を強化する。そのためシーズン中は外部の人手を取り入れる。こうした労働調整の背景には、都市部での豊富な労働力がある。それは逆に労働者側という視点に立てば、1年のうち約6ヶ月失業状態におかれていたことを意味する。またすべての小売業に、季節ごとの一定の需要があったわけではない。そのため冬場に忙しいピアノ製造工は、夏の閑期に家具製造に移動する（限られた範囲ではあったが）ケース<sup>(30)</sup>もあった。選択できる仕事がない場合、季節はずれに安売り目的で通常販売製品をストックし、小さなマスターという名で自分の家族を宣伝、家族の扶養目的で稼ぐ。不況とオフに製造販売する熟練の増加は、不熟練層の仕事や雇用を圧迫する原因にもなっていたのである。

1850年代ロンドンの衣服製造販売の上級職（女子）で、週6～8シリング（本論 p.5 参照）。4台の織機担当の女工は16シリング（1830年代12シリング、前稿 p.72 参照）で労働貴族に相当する。自動織機工（熟練女子）は女工のトップに位置づけられた。女工、衣服製造は1851年女子第2位の職種であるが、女工の大半は苦汗労働者で縫製などの単純作業が中心であった。下層女子労働者は、どの職種においても不安定で先が約束されていない。その中で、Lucy Luck（1848年ハートフォードシャー Tring 生まれ）の例外的なケースがある。

レンガ工の父は大酒飲みで、家族（4人の子供がいる）を捨てて消息を絶つ。Lucyは組合支援による施設で育ち、9歳の

とき綿工場へ。13歳で大衆酒場の給仕係。15歳で無給の見習いとして家内工業のムシロ編みに奉公、まもなく首に。家もお金もなく苦しい状況で作業場の見習い職人となり、結婚。1867年農場で出張作業労働を得て品質の高い麦藁帽子製造を始め、その後ロンドンで2店舗を運営。麦藁帽子製造は7月からクリスマスの間は閑期のためその間雑役婦、洗濯女、針仕事で幼い7人の子供を育て上げた<sup>(31)</sup>。

上流階級専門のシャツ仕立業では、冬が通常閑期。週2日間だけの仕事という時期もある。中流階級対象の子供専用服製造業では、1時間3ペンスの仕立賃。週6シリング6ペンス。不況時は仕事もなく無賃金という例<sup>(32)</sup>もある。

他方 West End の衣服製造小売業は、3月終わりから8月が繁忙期。また10月から12月にかけて数週間の仕事を下請け労働者が待っている。以下は1908年の雇用調査記録から2つのケース<sup>(33)</sup>。①ウェストコート製造の少女—小さな作業場で働く。10人の労働者がいたが、繁期以外は半日雇用、週半日の仕事で首にはならなかった。②在宅労働の3人の娘を持つ寡婦—上流階級専門の下請けをしたが、数ヶ月間仕事が回ってこなかった。衣服製造は秋冬が忙しい。それでも衣服12着4シリングの仕立賃で、賃金は週8シリングに過ぎない。

20世紀初頭で全女子労働者の3分の2が工場労働者、3分の1は在宅労働者といわれているから、大都市に集中していた女子労働者のほとんどが、非常に不安定な賃金労働におかれていたことを示している。

労働需要に依存する偶発的な雇用は、低い熟練労働の中にもある。20世紀初頭、特に建設また不熟練労働者に多い港湾労働に、こうした雇用環境が生じている。ロンドンでは、失業熟練家庭は下層労働者家庭と同じように妻たちが埠頭の人足として、あるいは工場下請仕事で収入を補い生計を立てる光景は珍しくなかったのである。当時港湾労働者は圧倒的に日雇い、一時雇用が多く、日雇い労働の4分の1が仕立業、靴製造業の経験を持っていた<sup>(34)</sup>という。湾岸労働者は常用雇用以外、その週かその日だけの雇用。しかも仕事で保障されているのは病気のと時のみ。現場監督が毎朝夕、また午後指定した場所でグループから選抜の仕組みを採用する。会社は多くの常用労働者の残した仕事を、毎日日雇いローテーションで分ける。時間給で割高。しかし不安定雇用のため、多くは生活に苦しむ。路上で職探しする多くの労働者を増やし、不安定な社会環境を助長した点は少なくとも指摘はできる。1850年代リヴァプールは多くの埠頭を抱え、生活拠点である製造業地域に近いという立地条件のよさもある。そのため失業した熟練工にも、一時日雇労働に加わる可能性もあっただろう。彼らにまた20世紀初頭の湾岸労働者同様、厳しい労働と生活環境を重ね合わせることは可能だ。

19世紀初期の、貧困の激しい工業都市マンチェスターの断面を描いたE. Gaskellの『メアリー・バートン』（1848）は、労働者たちの悲惨な生活をジョン・バートンに投影している。作品では、綿製品の売れ行きが落ち、製品は倉庫に積み上げたまま、どの工場でも労働時間が短縮され仕事にありつけず、借金生活に苦しむ不況時代の貧困の主人公がいる。40年代綿産業地域では在庫、過剰労働者にあえいでいた。それでもバートンがおかれた状況はまだましな方だろう。彼より下層に属する労働者も多くいたし、そうした労働者のおかれた状況は、19世紀中ごろのマンチェスターやリヴァプールのアイルランド移民労働者の状況と重ね合わせれば、ある程度想像できる。

マンチェスターの人口は1851年までには45万5,000人へと増大。1850年ごろ約40%の子供が5歳までしか生き残れない

環境<sup>(35)</sup>だった。マンチェスター、リヴァプールは生活環境が最悪といわれ、Woods資料<sup>(36)</sup>では平均寿命(1851～60年)が32歳(マンチェスター)、31歳(リヴァプール)、1861～70年でも30歳、31歳で他の主要都市より低い(また特定年齢の、人口100人当たりの年平均(1861～70)の死亡率<sup>(37)</sup>も、非常に高い。／0歳、30.5人、1歳、18.5人(リヴァプール)／0歳、25.1人、1歳、13.6人(マンチェスター)で、産業地方の高い死亡率が、移民の大多数が貧民家族で構成される産業都市への貧困労働者の流入と、その家族の幼児死亡率とも相関している)。

1849年 *The Morning Chronicle* 紙に A. Reach は次のような記事を寄せている。

Westport 出身のアイランド人家族は、「8フィート×12フィートぐらいの天井の低い湿った地下室に…小さな場所に少なくとも12人の男女、子供たちが住み、換気が悪く、暖炉のささやかな火の熱と、明かりの暗い室内の臭いは異常な感じだ。彼らは階段の石の上にボロをまとって寝たり、ワラを敷いたりして生活していた。掘って立て小屋に住んでいた人々の半数は、家に帰らずマッチやホウキ売りをしていた<sup>(38)</sup>。」

また1842年ドイツ人宿泊者が、マンチェスター市内の路上で目にした地元の子供工場労働者たちの姿は、次のように紹介されている。

「…彼らの多くが手や足を失っており、まるで戦争から今帰還したかのようであった<sup>(39)</sup>。」

1854年リヴァプール市議会委員会では、アシュトン・アンダー・ライン(マンチェスターの東16キロ)の住民の証言が次のように報告されている。

「…町を通り抜けていくアイランド人女性を数百人みてきたが、彼女たちは赤ん坊を背中にくくりつけ、2、3歳の幼児は自分で歩いていた。子供たちの多くは飢餓と厳しい生活から、虚弱であるのは疑う余地もなく、人の混みあった換気の悪い部屋に住むことになるから、ほどなく死亡統計の数字を大きくするに違いない<sup>(40)</sup>。」

貧困と過酷な労働を強いられた低層労働者家庭の実情は、労働妻の姿にも反映されている。出産の床につくぎりぎりの日まで工場働き、1ヶ月もたたないうちに再び仕事に戻る。母親のまねをできない小さな子供や他の女性に、わが子の世話を任せる。マンチェスターでは1840年ごろまで、「子供に睡眠薬を飲ませることが習慣的であったし、アヘンチンキを含む「ゴッドフリー強壮剤」が売られていて、母親は仕事に出かけるとき子供を静かにさせるためよく飲ませていた<sup>(41)</sup>。」

賃金カットや解雇で乗り切ろうとする業種が多い中で、ランカシャーの町工場のように繊維を基幹産業とする地域では、時短、パート雇用、賃金カットなどを組み合わせて調整するところもある。が、実情は苦しかった。季節による繁期、閑期、周期的不況への対応は業種によって違うが、工場労働者は時短雇用形態でしのごケースがよくみられている。不況が全小売業に広がっていたため、ランカシャーの雇用はこの形が奨励された。多くの雇主や労働者にとって低賃金雇用は、失業がもたらす不安定な地域社会情勢や混乱を回避する策でもある。それでも解雇は避けられなかった。

ランカシャー自動織機工ジャーナル(1856～75)から、一記載報告を取り上げてみる。

手織工 John O'Neil (1850～60年代)は1833年自動織機工になる。やがて Low Moor へ家族で移転。1855年 Clitheroe で娘と Garrett and Horsfall 大工場働く。ここでは約700人の労働者が週5,000の綿衣料品を製造。数週間彼は3つの織機を

担当。まずまずの生活、新しい衣服を、そして新しい家具を購入。1861年初め、Low Moor でランカシャーの町でおなじみの6週間の賃金ストライキが始まる。彼は Clitheroe 織物組合の新組合長に。しばらくして綿飢饉の影響で、時短、賃金カット、組合員の削減を選択。1861年9月週4日制が始まり、62年原綿仕入れが悪化。会社は半数以上の400人を解雇。他の関連工場もストップ。時短と閉鎖で中間の再雇用のチャンスはなかった<sup>(42)</sup>。

炭鉱地域では、不況時の対応としていろんな調整がとられる。坑内の労働日数の削減、重労働の分散が一般的であったが、組合活動など雇主と紛糾して解雇されたり、その後の再就職などの影響を受けた失業熟練もいる。Edward Rymer (Durham, Boldon 生まれ) のケースである。

1835年、立て抗掘労働から9歳で鉱坑通風口の開閉係に。操作係を経て採炭夫になる以前の運搬鉱夫であったときのケース。段階的な毎年の苦役制度に反対し1857年病気を機に自分の意思で契約を破棄、そのため14年間入獄。2年後不具という理由で侮蔑した監督と闘争、裁判で1ヶ月の過酷労働を命令される。そのときから自分がマークされた人物であることを明言。1860年の例年の雇用期、彼と地方炭坑夫組合の幹部らは雇用を拒否された。彼は炭坑夫として26年間、13回労働契約拒否という仕打ちを受けた<sup>(43)</sup>。

雇主との紛糾で解雇されるケースに Will Crooks (1852年 Poplar 生まれ) もいる。彼の父は低賃金労働で防水服やコートを作っていたが、6人の子供たちを養育できなかった。母親は Will を樽製造の見習いにさせようとしていた。Will は19歳のとき、過度の残業に抵抗。彼は不熟練者の仕事のみを押し付けられ不満を持ち、他の従業員を扇動したとして首に。ロンドンで彼のうわさが広まり、あらゆる店は彼を締め出す。リヴァプールでしのごの仕事をみつけながら、その後西ロンドン醸造会社で10年間常用雇用された<sup>(44)</sup>。

衣料製品のうち、靴下などは季節ものとして左右されやすい。そのため織工は強い組合組織があっても賃金体系を維持できない。また安売り繊維小売では組合がないため、ロンドンでは絹工場も減少していく。そのため織工の減少は、彼らの社会的地位の弱体につながった。製造小売の技術職は、熟練と一般労働者の労働条件の格差に執着したが、基本的には、新しい業種の台頭から生ずる競争を避けたかった。つまり時勢に即応できなかったからである。そのため安定指向が強かった。過剰熟練人員と低賃金の不熟練の増加、こうした事情は正規でない仕事を労働者側に負担させ、熟練と不熟練労働者市場のバランスを一層不安定なものにしていたのである(非、無職、失業の増大の統計は *CHB* 資料より。成人男子の統計は、前稿 p.72 参照)。

1867年のイングランド、ウェールズの熟練労働者数を、D. Baxter は総手織職人(不熟練を含む)778万5,000人中の112万3,000人<sup>(45)</sup>と見積もる。また組合組織に含まれる職業として、造船、家具、上級仕立屋、靴製造、エンジニア、鉄鋼などをあげ、常用雇用者の基本給は週28～35シリング、その他の熟練工として、仕立屋、靴製造工は週21～25シリングとみなしている(Hayward, Porter 資料(前稿 p.73 参照)では、ロンドンの一般労働者は1日10時間労働で3シリング6ペンス。レンガ工、大工、石工、鍛冶屋(工)1日6シリング6ペンス)。Porter 資料では、彼らは週約39シリング稼いでいることになるが、1870年ごろ(小売業で失業率が低い時期に当たる)ロンドンのレンガ工は、この業種で最高賃金週37シリング<sup>(46)</sup>を得ている。屋外作業であったため、年30週とすれば55ポンド10シリングであり、労働貴族としての面子をかりうじて保

つことができる。屋外作業を主とする熟練工にとって季節、気候、需要に大きく左右されやすく、また繁期、閑期があるためフルに働いていたわけではない。また、こうした労働条件は他の業種にも当てはまるもので、年間平均の週で割った賃金の労働者は、Mayhewが指摘した賃金に近いものもかなりいたのではなかろうか。不況時のロンドンの熟練工たちの賃金は、これらの資料で想定する以上に悪化していたと十分予想できる。

長期失業に直面した熟練労働者家庭では、まず家庭の支出を抑え、長く生きるための生活資源の確保が一般的パターンという。下層労働者家庭では、時に食料は収入の3分の2以上を占めたため、食料支出の削減は避けられない。肉類を抑え、パン、ポテトに大きく依存する食事はよく知られている。それでも大半の家庭は困窮したと考えられる。熟練中流層は儉約の美德精神を貫き、ある程度の資金余裕を持つものが多くいた。下層労働者家庭は儉約する余裕すらなかった。会員制の団体や組織の状況によって、支度金、病気年金助成、失業手当にも違いが出てくる。そのため失業熟練でも家族の一致結束による生計確保は、基本的に大きく変わらない。しかし大きな違いがある。失業中の下層労働者に救済法以外公的な救済手段がなかったのに対し、失業熟練の場合、ピアノ製造工のようにいくつかの職種にまたがって、パート雇用などに関わる可能性があった点である。そのため見習いにとって不利な状況を生むことになるが、見習いにも利点があった。雇主はとにかく安い労働力をフルに使って、不況時を乗り越えなければならない。低賃金で若いという理由で、いざというとき最後まで残れたからである。

ちなみに社会的な失業対策として、小売団体、州、国のセフティ・ネット、組合の支援対策、地域でチャリティ、たとえば無料食堂の開設、食料、衣類、燃料などの緊急支援が組合員中心に施されたケースなどがあり、多くのケースでは不十分な結果を生んでいるという。1880年代に入っても労働者の大半と非組合員の場合、公的な支援は限られていたようである。これは、家族の労働形態が以前と変化していない状況を示唆している。妻たちは周囲の家庭の洗濯出張や子供の世話、繁忙工場のパート労働を、また子供たちは学校の授業前後の仕事として使い走り、ミルク配達、木ずり張り手伝いなど、家族結束の生計分担は変わっていない。特に手職労働者家庭の多くが女たちの稼ぎに依存し、いざというとき、妻たちが唯一の支えとなっている事実がある。

熟練の多くは、毎年季節需要の変化や気候、それに短期間の経済状況に影響を受けている。1830年代、ロンドンの塗装工たちの常用雇用が1年のうちに倍増したという例が示すように、好不況における雇用調整は小売企業の規模によって大きく異なった。建設業など屋外業種では特に顕著であった。またロンドンの小売業は流行シーズンの影響を受けやすかった。毎年首都を訪れる人々による消費シーズン、2、3月の議会シーズンで上流階級がロンドンに戻ってくる時期、富裕層の海外旅行、保養で移動する時期など、Mayhewによれば<sup>(47)</sup>こうした時期に小売は影響を受けるという。たとえば50年代、West Endの注文仕立屋、靴製造、家財製造、帽子屋、衣服製造、四輪馬車製造工、馬具製造人、蹄鉄工、料理人、ジャム製造、パン屋、造花業、また富裕層の家や家具などの修理を請け負う小売、天井しっくい塗り、配管、室内装飾、椅子張り、彫刻師、メッキ師。こうした小売業種は6月が雇用ピーク、8月が谷間で10月、11月に小さなピークが訪れる。

季節に左右される小売では、見習いたちもこうした労働関係の中で雇用と失業の狭間に絶えずおかれていた。フェルト・ハ

ットの製造見習い職人 James Burn も、その1人である。

「…シルク・ハットの流行のため多くの在庫を抱えた。彼は全く違った材料の調達、製造場所を確保しなければならなかった。16人を雇用した帽子製造の主人は、夏35～40人を雇用したが、冬場は20人のみ。Jamesは旅回りをしなければならなかった。しかしどこも半日すら雇用してくれない<sup>(48)</sup>。」

1850年代の農業労働者も同じような状況におかれている。農業地域、田舎では家族7人全体で働いても週7シリング賃金の生活はありふれていた。1849～51年、トモロコシ価格が崩壊、農業労働者のさらなる低賃金と失業を招くことになる。農業地域では雇主は家族を抱えた男たちを優先的に雇用。また常用労働者は低賃金でも、与えられた仕事に対しパート労働者以上に責任感も強く、日雇のような不安定な生活を嫌った。少なくとも表面上雇主と労働者の信頼関係が保たれていたが、地主のいいなりになった時代でもある。以下の2つのケース<sup>(49)</sup>は当時の農業社会と、そこで働く弱者の立場を具体的に示している。

James Bowd (1823年ケンブリッジシャー生まれ)は7歳のとき病気で足に障害を持つ。その後すぐ馬を引っ張り、鋤や鋤で農作業に従事。10代で毎年雇用に出かけ、1849年結婚。そのときまでに1つのベッド、家族用の聖書と3シリングを貯める。日雇労働を続けるが、1855年梯子から落ち鎖骨を折る。その年の6週間の労働機会を失い、収穫期の臨時収入も失う。主人は冷たく若干の仕事以外もらえなかった。その後不運にも借家の小屋が燃えベッドだけが残った。彼は4ポンドの借金を、裁判所で月4シリングの分割支払いを命じられた。

Thomas Edwardsは辛い体験をしている。彼は家族の飢えをしのぐために他人の畑からカブ5個を失敬し、14日間の重労働に課せられた。家族の生計は崩壊。1854～5年の冬救貧院に過ごす。窃盗者として地域に仕事がなく、56年春7マイル離れたレンガ製造所へ連れられていく。

農業労働者家族では、女たちはよく畑労働に出た。また子供たちは6、7歳から畑仕事で1日2～6ペンスを春から秋にかけて稼いだ。ミッドランズやリンカンシャーなどの農業地域では、児童たちの農業集団が雇主によって運営されている。リンカンシャー Croyland のある農場で働いた、Mrs. Burrows (少女時代)のケースである。

「鞭を持った監視人の下で1日14時間労働。彼女は5歳を含めた40～50人の子供集団の年長であった。父は脳腫瘍の病气、母は家族の中心になって必死に働いたが慈善を求めなかったし、借金もしなかった。母は乾パンでしのぎ、子供たちはパンにわずかなバターをつけることができた。母は不平をこぼさなかった。慈善保護を受けるということは貧困を認める証である<sup>(50)</sup>。」当時労働者妻は貧乏に慣らされ、地主にたてつく環境もなかった。彼女は4年後リーズの町に連れて行かれ、工場の仕事に従事する。

1861～71年にかけて農業労働者人口は178万から163万へ(前稿、pp.71-2参照)15万人減。農村社会が都市型の工業社会へと変容していく中で、農業人口は1861年の18.5%から1901年には半減することになる。農業所得の国民所得に占める割合も1860～64年の15%から1895～99年の7%に激減<sup>(51)</sup>していく。それでも機械導入などで労働条件が若干改善されていく背景があった。1860～70年ロンドンと周辺郡の工業地域農業労働者、一般労働者の賃金について、次のような資料がある。ロンドン周辺で16シリング6ペンス。ランカシャー、ヨークシャー、ウェスト・ライディングでは17シリング1ペンス。サウス・ウェールズでは12シリング8ペンス、ミッドラ

ンズでは14シリング1ペンス<sup>(52)</sup> (Porter資料(前稿p.73参照)では、1860年代中ごろのロンドンの一般労働者は1日10時間労働で3シリング9ペンス、農業人夫は週14シリング)。

田舎地方では賃金のばらつきがみられる。時代背景や労働条件の改善を考慮しても、この資料は、農業労働者の賃金が都市部でも田舎でも抑えられていたことを示している (Great Britainの平均は14シリング4ペンス)。

ロンドンでは、1850年からサービス業での雇用環境が拡大しつつあった。下の労働従事者資料(A)が示すように、1851～71年産業間で男女の雇用が伸びている。その多くは、ロンドン周辺都市に吸収されていく不熟練労働者や一般労働者たちである。一般サービス業の雇用は1851～1911年間で3割以上増加することになるが、下層階級出身の若い女子労働者にとってほとんど縁のない職種に過ぎない。家事奉仕業の増大がそれを示している。1851～71年にかけて織物製造9.1万人増に比べ、家事奉仕は54.3万人増になっている。このうち次表(B)では、47.5万人(雑役婦含む)が女子であり、主要職種の中でも突出している。

(A) 1851年の農業労働者を除いたイギリス労働従事者(労働者階級男女)は791万人。うち男子では①織物製造108万人②鉄工業、機会運輸(鉄道、レールなどの鉄製品製造)53万人③建設49.6万人④運輸43.3万人⑤炭鉱38.3万人。女子では①家事、個人奉仕113.5万人②織物製造63.5万人③衣服、衣類49.1万人④専門職10.3万人⑤食品、飲料関係5.3万人

1861年の農業労働者を除いた労働従事者(男女)は830万人。うち男子では①102万人②75万人③59.3万人④57.9万人⑤45.7万人。女子では①140.7万人②67.6万人③59.6万人④12.6万人⑤7.1万人。

1871年の農業労働者を除いた労働従事者(男女)は1,037万人。うち男子では①98万人②87万人③71.2万人④65.4万人⑤51.7万人。女子では①167.8万人②72.6万人③59.4万人④15.2万人⑤7.8万人(前稿, pp.71-2, C.H.B資料より)

#### (B) イングランド、ウェールズ1851-1931(万単位)

	イギリス 全体室内		屋外、男	雑役婦
	男	女		
1851年	113.5	7.43	75.16	5.54
1861	140.7	6.21	96.28	6.53
1871	167.8	6.84	120.44	7.77
1881		5.63	123.04	16.04
1891		5.85	138.62	10.48
1901		6.42	133.08	18.03
1911		5.43	135.94	22.63
1921		6.10	114.87	11.85
1931		7.85	133.22	14.01

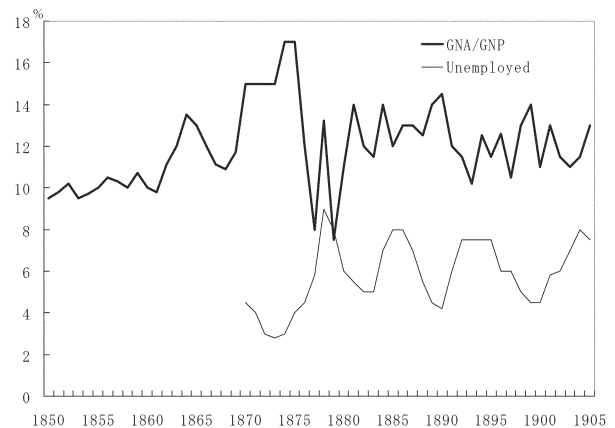
C.H.B資料(イギリスの家事奉仕総数)とC.E.B資料の合成表

出典:P. Joyce, *The Cambridge Social History of Britain*, p.133.  
M. Thomas, *The Cambridge Economic History of Modern Britain*, Vol. II, p.12.

イングランド、ウェールズでは、1851年女子家事奉仕業(雑役婦含む)は80.7万人、全体の71%を占めている。1861年では全体の73%。総数27.2万人増のうち22万人増。1871年では全体の76%。総数27.1万人増のうち25万人増。この資料では1861年女子家事奉仕の81%がイングランド、ウェールズに集中。1871年では92%がイングランド、ウェールズに集中していることになる。つまりロンドンやその周辺都市部、新興中流階級家庭増大に伴った雇用状況の表れでもある。1850年代召使雇用の広告が紙上でよくみられるのは、若い下層女子労働者の限られた職場選択を表している。家事奉仕の多くが、McClintockの示す召使像(前稿p.75参照)から想像すれば、主人に従順な使い捨て低賃金労働者であった可能性は高い。しかし雇用機会が多いだけ、自立的な労働移動の可能性も少なからずあったであろう。1850年代若い召使の平均賃金は10ポンド前後に過ぎないが、卑しい職業と知識層からみなされてきた家事奉仕は、その労働条件が賃金の面で改善されてきたことも確かである。1881年のBoyerの賃金表では、年平均37.6ポンド(本論p.9参照)で、メリアス、絹製造、衣服製造の女子労働者より所得が上回っている。不況時でも雇用需要が高いのはその分移動も高く、機会があれば、条件のよいところへ移動していた若い女たちも増加していたと考えられる。Carlyle夫妻は30年間に40人、1人の召使を交互に入れ替えている<sup>(53)</sup>。特に60年代の物価高と人件費の高騰に、T. Carlyleがカナダに住む弟宛の手紙で言っているところをみれば、人権派の彼が平気で召使を使い捨てにしてきたとは考えにくい。賃金の安い召使を頻繁に雇用していたのだろうが、条件の折り合った召使は年16ポンドの賃金を得ている。つまり50年代の召使使い捨て習慣が、社会的に変化しつつあったことをこの例は暗示していないかどうか。物価高を理由に、労働条件を主張し始める召使が増えてきた兆しのようにみえるが、実情は定かでない。ただし次のような可能性は残っている。家事奉仕が卑しい身分(これは知識中流層が作り上げたイメージに他ならないが)の仕事であっても、時代に対応していける安定した1つの職業になりつつある要素を含んでいた、という彼女たちの視点から捉えられた職業観が考えられないか、ということだ。60年代後半職業の多様化が浸透しつつある中、限られた職場進出しかなかった彼女たちにとって、よりよい条件の働き場を求めるのは、与えられた権利ではなく選択する自分たちの権利、という考えが根付き始めた時代でもなかったかということである。慢性的な不況社会に身分より生活を重視する、職業意識の高い若い下層階級女性の台頭が、上の突出した家事奉仕増大の背景にならなかったかどうか。この意味で70年代以降の召使の立場は、他の女子職種環境とは明らかに異なってくる可能性を持つ。そうした可能性を持っている限り、若い女子召使たちを、これまでの否定的価値観やイメージに寄りかかった視点から捉えるべきではないと考える。1914～18年家事奉仕雇用が増大しているのは、多くの男子出兵による雇用増大と労働市場の穴埋めという背景がある。

次の表は、「イギリスの貯蓄と投資1850-1914」と「失業率1870-1939」から抜粋合成したものである。

次の表は、「イギリスの貯蓄と投資1850-1914」と「失業率1870-1939」から抜粋合成したものである。



出典:British savings and investment rates (M. Edelstein, C.E.B, p.198), Unemployment rate (T J. Hatton, C.E.B, p.348)



G.N.A/G.N.Pは50, 60年代急速に上昇している。この急成長の背景について、M. Edelsteinは以下のような指摘をする。①海外地域は当時資本市場が成熟しておらず小さな投資に過ぎなかったが、オーストラリアでの金鉱発見により、拡大的な経済成長の先行投資がイギリスの資本輸出の強い分野に向けられた。②1857年の暴動後のインドでイギリスは軍隊と緊急食糧輸送のため、鉄道システムを拡大しようとした。③鉄道投資はヨーロッパだけでなく、アメリカが最大の投資国となった。この時期アメリカにおける鉄道建設システムは3倍になり、1860年代その倍へと拡大する事情があった。鉄道建設への貸し資産の実質経済資金は、拡大方向で投資されていく。④50, 60年代の海外投資の急激な高まりが、結果として海外と国内の収支間の不均衡、格差を生むものであれば、この格差が新しい高い海外収益によって作られたということになる<sup>(54)</sup>。

1850, 60年代の総生産成長率が、国内と海外の収益バランスがもたらした成長率という見方は、G.N.Aはそれを支える業種産業への投資であり、労働需給もそこに大きく依存し始めたということの意味している。この時期の、小売産業全体の失業率については定かではないが、国内投資が1850～69年間では7%台を維持<sup>(55)</sup>しているものの、大工の50年代の失業率が7.5%であることから考えれば、特定業種を除く従来産業の失業率はかなり高いということになる。ちなみに1878年の失業率は9%（国内投資10.5%）、1893年7.5%（8%）、1904年8%（10%）<sup>(56)</sup>であり、国内産業の活力が1850～1900年間に大差なく推移（1886年の国内投資率は6%）している。60年代といえば、鉄道ネットワークの普及、港に移動する製粉所の増設、冷凍装置の普及など、海外からの輸送コストの大幅ダウンに伴い、輸入食品（コーン、野菜）が増加していく時期である。また70年代イギリスの自由貿易政策にも助けられ、アメリカなどからの小麦の輸入が激増する時期でもある。しかも穀物価格の暴落と深刻な国内農業不況が、そこに待ち受けている。

この時期、内外の情勢に大きな変化が現れてくる。海運業などの収益が貿易収支の赤字幅を上回っていたが、70年代以降急増した海外投資収益が、赤字を埋める仕組みで経常収支の黒字を維持拡大。資本輸出が果たす役割が極めて大きくなっていく。また植民地獲得競争もドイツ、アメリカ諸国と激化していく。こうした中、農村社会が都市型工業社会へと変容、農業人口の農業所得の国民所得比率における割合も、19世紀末には半減。小麦の国内消費も4分の3は輸入<sup>(57)</sup>に頼る状況になる。農業の将来に見切りをつけた大地主は、土地以外の収入源としての国際、株式への投資を増加させ、地代の取得者から利子取得者へと性格を変えることによってその生計の基盤を確保、昔ながらの社会的威信を維持し続ける。経済成長の中で支えられた金融、流通増大に伴って下層中産階級が増大。一方この構図の持つ歪みは、労働市場での小売産業の失業率にも反映されている。

失業は時代、場所、産業職種によって異なり、輸出関連の業種（金属、エンジニアリング、造船、建設、炭鉱）は投資や輸出生産量と結びつくため変化しやすい。そのため異なった産業部門との相関によって、期間的ブームや不況は経済全体に広がっていたという事実が、先の表の周期的不況パターンからも窺える。1879年15.3%の失業。1884～7年10%失業。1893～4年11%失業。こうした不況の年<sup>(58)</sup>を、エンジニアリング、造船業、金属小売組合が経験しており、また1887～95年エンジニア合併組合では、平均29.7%の組合員が1年のうち約2ヶ月間平均で失業状態にあったという。

小売経済の不振は、社会的地位の高かった印刷工、植字工にも影響を与える。印刷会社は70年ごろから資本を移動、地方の安い労働を雇用（組合組織、抵抗勢力も弱い）、見習い工も3分の1から6分の1へ削減。また1880年代新しい植字機械を導入。手作業でなくなった。1885年ロンドンの植字組合では組合員の20%が失業<sup>(59)</sup>。また家具、備品製造、木細工小売も季節業種として苦しんだ。産業は賃金成長率が変わったばかりでなく、賃金も頻繁に変わった。金属小売業では賃金はその年の不況に左右<sup>(60)</sup>された。

1870年代（中ごろか）男子工場労働者のうち週40シリング以上は20%に満たず、大半が30シリングかそれ以下。1870年代造船、機械工業不熟練労働者は週15シリング。働き尽くめで年50週としても、年収37ポンド10シリング（『路地裏の大英帝国』、p.124参照）も参考になる。

すでに述べたように不況時いろんな調整が採られている。繊維では短時間労働、一時解雇が一般的。臨時パート労働者は週1～3日雇用が通常で、失業は頻繁であった。

湾岸、建設、あらゆる小売業の不熟練労働者は、日雇い待ち、その日の状況に応じて雇用される。こうした形態が一般労働者の実質的な核を作っていた。Boyerは1890年代初頭から極貧者の比率が高くなるという。つまり熟練の要らない仕事は若者にとって多くあった（たとえばビネガー製造、鉄工、印刷、車大工など、若者はパート雇いで1人週2シリング6ペンスであれば、雇主に2人雇っても大人の労働者よりはるかに経済的であった）が、18～21歳に達したとき、また大人になったときの不熟練の労働機会での賃金が不況時に急速に低くなる<sup>(61)</sup>からである。不況とあいまって、多くの下層貧困労働者と低賃金の熟練労働者家庭がいたことが想像できる。彼らは地域社会で、店やスコットランド行商人や質屋（もぐりの高利貸しもいたが）とお互い最大限に利用しあった。行商人や店主にとっても同じ地域の共通した生活意識、階級帰属意識を持っていたばかりでなく、お客がいなくなると、自分たちも生きていけないという理由もあった。質屋は、特に不況時は、労働者たちの中心的救済システムにおかれていたのである。当時イギリスでは、質屋はかなりの数に上っている。1870年では3,390軒。1914年5,087件の質屋許可証がイギリス全体で発行されたといわれ、全労働者階級一家庭につき2週間に一度は質屋通いが行われていた計算になる<sup>(62)</sup>。

1880年以降の小売業経済は、停滞する産業構造の中で国内消費に依存し、不安定な雇用社会でもあった。それでもP. Johnsonは、「総体的にみて、1880年代労働者階級家庭では収入の約半分が食料に費やされながらも、平均実質賃金アップが必需品以外のものを購入する能力を増大させた事実から、以前より生活水準がアップ<sup>(63)</sup>」したことを指摘している。では所得という点ではどうなのか。

Boyerの1881年の年間常用雇用労働者の名目賃金表<sup>(64)</sup>（ポンド）を取り上げてみる。

鉄、銑鉄 63.1 / 炭鉱 50.5 / エンジニアリング 56.1 / 衣類（男） 53.4 / 建設 62.4 / 鉄道（敷設作業） 56.2 / 家具 61 / 印刷 54.8 / 履物 52.4 / 綿織物 38.1 / 農業（イングランド、ウェールズ） 39.6 / 家事奉仕（女） 37.6 / 毛糸、そ毛糸 38.8 / 一般労働 34.0 / リンネル、メリアス、絹織物 36.3 / 衣類（女） 29.3

（原注：上の表は1913年に所得に分類された職業。7つの低所得業種のうち、5つは大半が女子労働者で占められた業種。2業種（農業、一般労働）は不熟練男子労働者に占められてい

る。また常用労働者の年間平均所得は48.2ポンド。綿、毛織、そ毛糸、リンネル、メリアス、絹工業は多くの女子労働者を雇用。彼女たちの所得は40ポンド以下。)

Boyerは次のように付け加えている。「…32年後の1913年、これらの工業での賃金はすべての手作業労働者の平均よりはるかに低い。賃金の下落と経済衰退に入っていくが、1881年から1896年にかけては特に生活費が12.8%下落。そのため実質賃金が各工業労働者にとって増大する<sup>(65)</sup>。]

生活費の大幅下落、食料品を中心とする安い輸入品が回回り、生活にゆとりができた人々の生活水準は変化していく。熟練の場合雇用が安定しているときは清楚な生活を楽しんだが、自分の貯蓄を使い果たし、長期不況で雇用がなければ生活水準は下がる。しかし19世紀末の下層労働者家庭では依然として生活形態は変わらず、家族全体で労働、生活をしのいだし、賃金アップのため過剰な労働時間を割いた人々も多くいる。19世紀中期ミュージックホールのようなレジャーの形態が広がり始め、また鉄道網の普及に伴い団体旅行もブームを呼ぶが、大半の労働者たちに時間的ゆとりがあったわけではなかった。

B.S. Rowntreeの特定地域の労働者家庭調査報告が、19世紀末の労働者家庭の生活水準について論争を引き起こしたことはよく知られている。当時の労働者家庭の生活実態を、限られた資料から知ることはできない。が、生活水準向上の一要素となる平均寿命は確実に改善されている。Woodsの1851-1910資料<sup>(66)</sup>でみる平均寿命は、すべての地域で年々伸びている(幼児死亡率/イングランド、ウェールズ/は1850年代と1890年代1,000人中約153人で変化なし)。ロンドンでは38歳(1850年代)が43.7歳(1890年代)へ、マンチェスターでは32歳が36歳へ、リヴァプールでは31歳から38歳へと伸びている。医療改善、住宅改善、上下水道と衛生改善、食事の改善などの果たした役割が大きいというべきだろう。それでも不熟練労働者階級では1890年代、幼児死亡率(1歳未満児を含む)は6人に1人の割合になっている。

しかし都市部では田舎や地方より伸び率が相対的に低い。都市部労働層で寿命が短いのは、田舎や地方以上に下層労働層の高い賃金とより過酷な労働環境、生活環境が相関していると考えられる。田舎からの都市部流入者は、著しい実質賃金を稼ぎ生活アップを図ったが、熟練労働者とは違い、過酷な労働でフルに働かざるを得なかったのである。そのため病氣、怪我、事故に巻き込まれるケースもあったし、組合員でないためその保障もない。賃金アップは19世紀中期、健康を害する、死亡といった高いツケ、リスクを伴っていたのである(1860~70年の平均寿命は、イングランド、ウェールズの田舎地方では46.5歳。ロンドンでは37.7歳。他の都市部では33~4歳)。

都市部では高い賃金と高い失業率の共存する産業もあった。常用雇用であっても職種、経済の上下で格差がある。1901年の以下の業種の賃金比率<sup>(67)</sup>からも、19世紀末の労働者の雇用状況が暗示されている(炭鉱、建設は不熟練労働者の出入りが激しい業種)。

賃金変動のない業種( )内はその期間

鉄、スチール業労働者(約5ヶ月)/炭鉱(6ヶ月)/綿(2.9年)/エンジニア(3.8年)/建設(4.8年)/印刷(14.5年)

この状況は、低賃金の多くの熟練労働者家庭が存在していた以上に、炭鉱、スチール業労働者の高かつ不安定な賃金状況を、賃金期間で示している。1900年代初頭に入っても、貧しい熟練労働者家庭は多くみられた。1910年ごろの失業家庭

の報告書<sup>(68)</sup>では、夫、妻、5人の子供が週5シリング5ペンスの予算で生活している家庭や、夫、妻、1人の子供が週2シリング6ペンスで生活している家庭が記録されている。こうした家庭では子供たちは学校の期間的無料食事を施されたが、家族は1人当たり(1日)1.25~1.5ペンスで生活した。ジャム、マーガリンをつけたパンとお茶が、彼らの主食を占めたともいわれる。長年の失業と慢性的不況が、熟練労働者家庭の二極化を加速させていることも見逃してはならない。

### 3 おわりに

W.D. Rubinsteinは、産業革命後の工業発展がイギリス史における一過の特長であり、土地貴族や金融流通を中心とした資本主義経済が、常にイギリス社会において主導権を握っていたとみなす<sup>(69)</sup>。確かに12世紀ヘンリー二世の親征以来、アイルランドの植民地化その後世界各地の属領支配という歴史は、イギリスの経済拡大政策を物語る。政治的経済的収奪が資本蓄積の上でいかに重要な役割を果たすか、17世紀以降の植民地獲得政策、奴隷密貿易、対アジア政策などで読み取ることができる。19世紀中ごろの「インド大反乱」後の完全植民地化や、対中国との「アヘン戦争」後の半植民地化もその典型的例であろう。自国の経済繁栄と世界の優位に立つという国策が、スエズ運河株の買収(1875)や露土戦争への干渉(1878)など外交政策、また、1870年以降20世紀初頭にかけて獲得していく植民地政策にも反映されている<sup>(70)</sup>。この意味からいえば、岩倉使節団がすでにイギリス資本主義社会の特徴を見抜いていた事実も付け加えるべきであろう。

イギリス史という観点から、筆者にRubinsteinの指摘に立ち入る資格などない。ただこの帝国主義的経済路線が生む繁栄の功罪が、19世紀末のイギリス社会全体のメンタルな特徴を暗示している点を強調しておきたい。

1880年代後半、失業熟練層を巻き込んだ地域暴動や不穏騒動、社会主義運動は、当時の不安定な経済構造社会を反映するものだが、逆にいえば、不透明な未来に時代の変化を、新しい時代の到来を期待した人々が多かったことを示している。また初等学校では、富国をイギリス国民の当然の権利として織り込んだ教育方針<sup>(71)</sup>が、全国的に色濃く打ち出されてくる。この国政プロパガンダは、若い未来の担い手に「新しいイギリス社会」の方向性を主導する社会的力として、後に重要な意味を持つ。他方文学におけるデカダンスも特定の芸術家集団の思いとは別に、停滞した社会の変化を求める労働者や若者たちの淡い期待に応えた、という事実がある。デカダンスそのものが文学史において、過渡期における現象という評価がある。「新しい変化というバスに乗り遅れまいとする心理、そして芸術の理念を世俗的に実現しようとする理想。」これは1つのたとえに過ぎないが、こうした時代的な雰囲気、労働者たちの新たな社会への期待に結びついたようにみえる。時代的雰囲気という人々の心理を、次のようなたとえに当てはめることも可能だろう。「寒い夜空に花火を打ち上げたいという欲求。そうした人々の存在やその欲求すら知らず、ただ花火を眺め、次の花火に一時の安堵と期待を持ちたい、という欲求。」

ブルジョワ社会はどうだろうか。A. Symonsは『ハーバース・ニュー・マンズリー・マガジン』(1893年11月号)への寄稿文で、デカダンス文学を評して「…今日の代表的な文学は面白くて、美しく、斬新ではあるけれども、実際には新しく、美しく、面白い病氣<sup>(72)</sup>」と付け加えている。Symons

の指摘は、デカダンス文学だけが面白い病気にかかっていたのかどうか、時代の流れを考える上で非常に暗示的である。この新しく、美しく、面白い病気の文学的視線は、どこへ注がれていただろうか。1880年代のブルジョワ社会について、デカダンの1人M. Beerbohmはエッセイ「1880年」で次のように描いている。

「…少数派の砦であった古いグロウヴナー・ギャラリーにも人がおしよせた。…哲学者ロバート・ブラウニングは公爵夫人にたいしては一人ならず帽子をとってうやうやしく挨拶していた。またそこには、詩人で風変わりなテオ・マーズリアルズやあちこちのお茶の会の中心人物チャールズ・コルナーギ、それに喜劇役者の若いブルックフィールド…そこへ美術愛好家のダドリー閣下がやってきて彼の美しい若妻の腕にもたれていた。つやのない目をし、しわの寄ったヘブライの羊皮紙のような顔をしたディズレーリもやってきて、忠実なコーリーに耳打ちした…また片めがねをかけてステッキを持ち、帽子を斜めにかぶったウォルター・シッカートが…最近のしゃれ言をいいふらした<sup>(73)</sup>。」

どこかユーモラスで諷刺的なこのエッセイには、イギリス社会全体の持つどこか病的な雰囲気、ブルジョワ社会を通して描かれている。

1890年代富国と愛国に新しい可能性を託した児童たちがみたものは、淡い幻想的な花火に似ている。それは皮肉にも彼らにとって、将来の戦場の火花に重ねられていたといえないか。

社会はさまざまな顔を持つ。人々もその中で、生活を映し出すさまざまな顔を作り上げる。人々が時代の変遷をどのような顔をして送り迎えたのか、知ることは難しい。それでも時代から時代にかけて、彼らの生活模様は日々を生き抜くその顔の表情に映し出される、といえるだろう。だとすれば、80年代後半の労働者たち、子供たちの顔は、上流階級の人々の顔と比較すればどう描かれるだろうか。次のように描けるかも知れない—不安と淡い期待に満ちた顔（労働者階級）と自信と享悦に満ちた顔（上流階級）。これらは当時のイギリス社会の顔でもなかったか。

## 注)

- Henry Mayhew, *London Labour and the London Poor*, Vol. IV, *Those That Will Not Work*, Griffin, Bohn and Co., 1862, pp.364-5, cited by John Burnett, *Idle Hands*, Routledge, 1994, p.89.
- 前稿 (K. C), 金沢星稜大学論集第 37 巻第 1 号 (2003) (以下前稿と略), p.71 を参照。
- Mayhew の *The Morning Chronicle* (1848-9) へのレポート, Burnett, *Idle Hands* (以下 *I. H* と略), p.82 からの引用。
- I. H*, p.80 を参照。
- ibid., p.80 (本論 p.6) を参照。
- John Finch, *Statistics of Vauxhall Ward, Liverpool, 1842*, p.12, cited by *I. H*, p.111.  
同年, Bolton では 36% の鉄製造工, 大工 84%, レンガ工 87%, 石工 66%, 仕立屋, 靴製造工の 50% が失業したといわれている (ibid., p.92)。
- Report by James Parker, p.53, ibid., p.111.
- ibid., p.111 を参照。
- ibid., p.114 を参照。
- ibid., p.114 を参照。
- ibid., p.114 を参照。
- ibid., pp.98-9 を参照。
- Autobiography by Thomas Wood, 1822-1880*, offprint from serialized version in the *Keighley News*, cited by *I. H*, p.96.
- J.H. Powell, *Life Incidents and Poetic Pictures*, Trubner and Co., 1865, cited by *I. H*, p.96.
- ibid., p.85 を参照。
- ibid., p.85 を参照。
- ibid., p.85 を参照。
- ibid., pp.85-9 を参照。
- William Dodd, *The Factory System Illustrated in a Series of Letters to the Right Hon. Lord Ashley, Together with a Narrative of the Experience and Sufferings of William Dodd, a Factory Cripple, Written by Himself*, 1842, repub. Cass, 1968, p.113, cited by *I. H*, p.101.
- I. H*, p.99 を参照。
- Richard Hoggart, *The Uses of Literacy* (邦訳『読み書き能力の効用』, 昌文社, 1974) を参照。以下 (邦訳) は概略とそのページを表す。
- Mayhew の指摘, Burnett, *I. H*, p.176 からの概略引用。
- ibid., pp.83-4 を参照。
- ibid., p.171 を参照。
- The Autobiography of Francis Place, 1771-1854*, edited with an Introduction and Notes by Mary Thale, Cambridge University Press, 1972, cited by *I. H*, p.102.
- ibid., p.174 を参照。
- ibid., p.174 を参照。
- ibid., p.175 を参照。
- ibid., p.85 を参照。
- ibid., p.104 を参照。
- Lucy Luck, 'A Little of My Life', J.C. Squire, ed., *London Mercury*, Vol. XIII, No. 76, 1925-6, cited by *I. H*, p.107.
- I. H*, p.177 を参照。
- ibid., p.177 からの引用。
- George R. Boyer, *The Cambridge Economic History of Modern Britain*, Vol. II (以下 *C.E.B* と略), Cambridge University Press, 2004, p.288 を参照。
- Manchester, <http://www.spartacus.schoolnet.co.uk>, 2004 資料からの抜粋引用。
- Boyer, ibid., p.291, 1851-1910 年資料からの抜粋引用。
- 角山, 川北編『路地裏の大英帝国』平凡社, 1982, p.137 を参照。
- Manchester, <http://www.spartacus.schoolnet.co.uk>, 2004, p.3 からの抜粋引用。
- Factory Accidents, <http://Spartacus>, ibid., p.3 からの抜粋引用。
- 『路地裏の大英帝国』, p.141 を参照。
- ibid., p.142.
- John O'Neil, *The Journals of a Lancashire Weaver, 1856-60, 1860-64, 1872-75*, Mary Briggs, ed., The Record Society of Lancashire and Cheshire, Vol. CXXII, 1982, cited by *I. H*, p.97.
- Edward A. Rymer, *The Martyrdom of the Mine, or A 60 Years' Struggle for Life*, Introduction by Robert Neville, *History Workshop Journal*, Spring 1976, cited by *I. H*, p.109.
- George Haw, *From Workhouse to Westminster, The Life Story of Will Crooks, M.P.*, Cassell and Co., 1907, cited by *I. H*, p.109.
- Baxter 資料による。大工 13 万 6,000 人, 鉄工 9 万 2,000 人, 石工 6 万 9,000 人, レンガ工 (レンガ積み立て工) 6 万 5,000 人, 以下印刷工, 刃物工, 工具修理工, 造船工, 船大工, 時計計器工, その他塗装工, 陶器製造工, ガラス工などを含めた総数が指摘されている。しかし Burnett は, 当時台頭してきた新しい分野の産業に触れておらず, 不十分な資料とみている。*I. H*, p.80 を参照。
- 『路地裏の大英帝国』, p.124 を参照。
- Mayhew の指摘, *I. H*, p.103 からの概略引用。

48. James Dawson Burn, *The Autobiography of a Beggar Boy*, David Vincent, ed., Europa, 1978, cited by *I. H.*, p.105.
49. James Bowd, *The Life of a Farm Worker*, (Mss 1889), George Edwards, *From Crow-Scaring to Westminster: An Autobiography*, cited by *I. H.*, pp.125-7. (抜粋引用)
50. Mrs Burrows, *A Childhood in the Fens about 1850-60*, in Margaret Llewelyn Davies, ed., *Life As We Have Known It*, by Co-Operative Working Women, 1st edn 1931, cited by *I. H.*, p.126. (抜粋引用)
51. 橋口稔編『イギリス文化辞典』大修館書店, 2003, p.371を参照。
52. Dudley Baines and Robert Woods, *C.E.B.*, p.51を参照。
53. J. Burnett, *A History of the Cost of Living*, Gregg Revivals, 1993, p.236を参照。
54. Michael Eldelstein, *C.E.B.*, p.197を参照。
55. *ibid.*, p.193の図表を参照。
56. *ibid.*, p.193の図表を参照。
57. 『イギリス文化辞典』, p.371を参照。
58. *I. H.*, p.181を参照。
59. *ibid.*, pp.182-3を参照。
60. Boyer, *C.E.B.*, p.287を参照。周期的に起こる不況と失業、労働の時短は労働者の生活の不安定と雇用の不確実性を生んでいる。1870～1913年、男子工業労働者の平均失業率(*C.E.B.*より)は6.6%(Boyer, p.288), また産業全体の平均失業率は5.8%(Hatton, p.347)。1871～91年の平均的失業率は5.48%, 1892～1913年は6.18%(Hatton, p.371)。炭鉱では11.3%, 造船8.7%, 木材業4%, 印刷、製本業、衣類、靴、ブーツ製造では4%(Boyer, p.288)。
61. Timothy J. Hatton, *C.E.B.*, p.352を参照。また Burnettによると、若者たちが不熟練の状態でいろんな仕事を経験したあと、18～9歳で大人の賃金を要求し、失業のランクに不熟練労働者として入ってしまうケースが多いのもこの時代の特徴という(*I. H.*, p.172を参照)。
62. Paul Johnson, *Saving and Spending, 1870-1939*, Oxford, 1985, p.328, cited by *I. H.*, p.111.
63. Paul Johnson, ed., *20th Century Britain*, Longman, 1994, p.11.
64. Boyer, *C.E.B.*, p.286.
65. *ibid.*, p.286.
66. Life expectancy and infant mortality: England and Wales, 1851-1932, Boyer, *C.E.B.*, p.291を参照。
67. Boyer, *C.E.B.*, p.287を参照。
68. *I. H.*, p.189を参照。
69. W.D. Rubinstein, *Capitalism, Culture, and Decline in Britain 1750-1990*, 1993, (邦訳『衰退しない大英帝国』) 2章を参照。
70. 『イギリス文化辞典』, p.360を参照。インドと中国を介した三角貿易の仕組み—自国の綿製品をインドに売りつけ、銀の流出を防ぐためインド産のアヘンを買いつけ中国に売り、中国から茶、絹、陶磁器の他、輸入決済のための銀を自国へ運ぶ。銀価の暴騰とアヘン中毒問題を引き金に戦争、和平条約という名目の植民地化—はよく知られている。また1872年訪英した岩倉使節団は、19世紀イギリス社会の繁栄の背景に、これまでの植民地政策による経済的収奪という国策があることを再認識しているが、同時に繁栄がもたらす矛盾を見抜いている点を見逃すべきでない。使節団が現地で購入した、統計資料(1870—71)に基づいた『米欧回覧実記』(二), 第二十一卷「英吉利国総説」(岩波文庫, p.34)に、次のような記述がある。「…印度ニ所有シ、年年ニ其民膏ヲ搾リテ自ラ肥ユ…英国人属地ノ利ヲシボル、其状寔ニ之ニ類スルモノアラン」
71. Stephen Hearthorn は初等教育の現場で広く用いられた読本から、当時の児童教育の特徴を検証する。H. Cunningham の解説を参照 (*Journal of Victorian Culture*, 9.1 Spring 2004, p.92)。
72. Holbrook Jackson, *The Eighteen Nineties: A Review of Art and Ideas at the Close of the Nineteenth Century*, 1927, (邦訳『世紀末イギリスの芸術と思想』, p.62) からの引用。
73. *ibid.*, p.24からの抜粋引用。